

〈資料紹介〉 翻刻 『聖徳太子職人鑑』 (二)

翻刻の会

- 一、底本には早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の七行一〇二丁本を用いた。イ一四一〇〇〇二一四〇一。
 - 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
 - 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

井上瑞月、上久保咲穂、小夏珠々花、鶴岡里菜、林田珠加子、加藤慧悟、國廣悠真、山本美結。
- ※三〇年ほど続けてきた翻刻の会顧問としての取組の最後の成果報告である。

（山田和人）

給へ。此浦地ハルの山ぎはより大和路へくつきやうの拔道有。夫より紀の路本宮へは一筋道。一ト先落させ給ふへし。拔道の出口迄私が御案内。夫おぼ、お衣や柄香炉をちやつとく。追付ふつて来そふな気色と。蓑笠地ハルゆたん手取はやふ。夫婦あたふた着せまいらせ。旅より旅の御出立。杖よ。わらぢよこし車。巡る御運ぞいたはしき。

いつの間にかは表ハルに五作。様子とつくと見濟せば生垣押わけ立出る守屋が家来あがた。虎純人見とらずみ平馬。三人が目と目を見合。五作聞たか。虎純様。最前色に事よせて。忍ぶがはだへ手を入しに男の乳。（63ウ）きやつは慥に聖徳太子。シイ。高い。身は是に忍びおる。平馬諸共太子を追かけ拔道の先へ廻つて討て取。必ぬかるな合点かと。しめし合せて虎純が。内へ忍へば平馬と五作。くろの堤つみの稲村いなむらつたひあとをへしとふて走行。

斯地ハルとは知ず久馬平あたふたと立帰り。ヤレくく嬉しやおちついた。婆、め戻つたぞくと。いふに待チかね走出地ハル。シテ太子様は恙なふ。ヲ、紀の路の方へ夫レは嬉しや詮義が来てもモウ樂じや。ヤ夫レはそふじやが人見御供が今日じやげな。今迄は太子様がござる故。邪鬼じやくもう靈れうの矢は立ぬと（64オ）気がつよかつたが。太子様がござらねば孫が又氣遣地ハル。ア、もふ苦のやすまる隙ひまはない。サイノ其大難だいなんをこしてから。落しましてもよかろのに。サイヤイ大切と気が付たりや孫まごの事も忘れたと。天あめの御末ごすえに身命しんめうを投打フシ忠義ぞ頼もしき。

折柄時刻おりからじくや至りけん夫婦が家の軒口へ。何国より共白羽の矢。羽うびぎ高くはつしと立。わつと見るより夫婦は半乱。ナフ悲しや白羽が立た。矢が立た孫が命の切めかと。欠入ウて六松を祖父姥抱せいしめ重り合。さけび悲しむ表の方。

神主兵部かみねを真先まへに爰ウじや（64ウ）くくと大勢込入。六松引立立出る。ア、申くくマ、先待て下され。待地ハルツ

てくも聞入らず叶はぬ事と掟おきての権付けん。意地張親仁引退ひのけよと。口々詞くちあら立る。袖そでに取付サ、今始た事ではなし。尾張おひの直な江祭へまつり同然どうぜんで。昔からの掟おきてしつて居ます。是非ぜひに及ぬ神の差図さしづ。上ましょくカタへ迄未進かの替かりに水牢みずろうで苦しみ。ふしぎな事で金調かねととのへ。其苦しみを遁のがれたは人身御供ごこうに立ふ為。手に入つた金で有たか。またろくにたんのうする程抱だきもせぬに。ア、神様余あなりむごいはいのく。ハア、思へば余あなだけもない骸かみで。沢山さわに苦勞くろうを(65才)持もて生なたなア。申まを是こゝを産うだ。母親が来ております。まつかふくの入わけじやと得心いしんさせ。暇乞いとまごがさせたい。コレ禰宜殿様。少すくの内うちお待まちなされて頼たのみます。コレ皆の衆願しゅうがんふて下され。頼たのむくと祖父そふば、が。畳たたみにひたいを摺付すりく。孫六松すんろくしょうをたきすくめ正体涙まへだいなみに伏ふしづむ。神主兵部哀かみねを催もよほし。牲けいへは子の上刻こゝろ。四半時しはん用捨もちしてやらふ。名残なごりを惜おしみ早渡はやわたりせと村中むらなか。引連立ひきだ帰る。跡あとに夫婦ふうふはうつとりと肝かんを。取れしうき涙なみだ。娘むすめの生駒なまこま。奥おくよりも。しほくと立出たれば。二親ふたおやは目を泣なはらし。娘むすめ様子を聞きやつたか。アイ其様子聞きた故ゆゑ。暇乞いとまご(65才)をと跡云あとをいさし。六松むつしょうを膝ひざに抱寄抱かか上あて。顔打守かおうちる目は涙なみだ。声こゑよりもまづ先立まへだてせき留とど。兼かみて歎なげしが。ア、扱あもくあぢきなや。死しの縁無えんむ量りやうと聞きなれど。例たとすくなき牲けいへに取とれて死しる可愛かあひやな。親子おやこは此世計このよこの縁ゆかり。未あ来てか、を尋たずねても。顔かほも見られぬ物云ものいはれぬ。十じゅうより内の稚子わかごはさいの河原かはらへ行いふ。母ははは修羅しゆら道劍みちけんの山やま。定さだめて道みちも違ちがふで有あ。ヤ、何なにといやる劍けんの山やまの修羅しゆらの道みちのと。どふやらそなたのいふ詞ことば。身みにしみくと悲かなしう成な。サイナ。夫おとこにつれて日影ひかげの身み。今いまでも追手おしに出合いて。もしも討死うちじするならば。未あ来こは(66才)修羅道しゆらみち。劍けんの山やま。親子おやこ一ひと所にゆかれまい。すりやもふ是こゝが暇乞いとまご。此世このよのあの世あのよのあひ納なめとも。身みを震ふるせて歎なげにぞ。ヲ、く道理うじやくく。二人ふたりの親おやも諸共もろともに身みふし碎くだるうき涙なみだ。生駒なまこまはいとせき登のぼり。お二人ふたりのお歎なげ。分わて道理うと云いながら。所ところの法はは力ちからなし。

まだ此上こゝに私わがが身み。どの様な悲かなしむむざんな事こと有あ共ども。必かならずお嘆なげきなさるゝなへ。皆みな是こゝ浮世うきよの習なづはせぞや。

此子こゝろが最期さいごも定まり事こと。せめては生なきてゐる内うちに。仏間ぶつまで多おほかう致いたさんと死したる我われは多おほかうせで生なて居ゐる子こを回まわ向むかしに。無量むりやう

苦くるに苦くるの奥おくの間まへ。しほれ入いこそ哀あはなれ。かゝる歎なげキの(66ウ)折まこそ有あ。調子丸てうしじゆんはあはたゞ敷し。豊日ゆふひの宮みやを抱かかりせ。一ひと

方切かたぎ拔ひケ来きれ共ども追々おそ追お手ての取とかこめば。宮みやの氣遣きぢ防ぼぐは急成いそ。見合みあす家いへは天あまの与よへと。宮みやを押入おし奉ほうり。世よを忍しのぶ者ものを追人おつて

にさゝへられ難義なんぎの場所ばしょ。此こゝ稚おとこをお預おま申また。頼たのといふ間まも近付ちか追おつて。隠かくし家見いへせじと調子丸てうしじゆん又またも追手おしへ欠向かへふ。ア、時

も時折ときときも折ま。そんな機嫌きげんじやないはいの。きり／＼おんでとつかうど声こゑ。宮みやはうろ／＼表うらを見み。早はやふ戻もつてくれかしと。う

ろ付給つぎふ御顔ごゐんばせ。つく／＼見上みある年としかつかう。孫まごが身代みしろり思おもひ付つ。即座そくざの思案しあんも孫まごが可愛かあいさ。とゞろく胸むねを落おし付つ。(67

オ)ヲ、氣遣きぢ有あルなかくもふた。其代そのしろに。おれが孫まごよさらばといふたら。祖父ぢい様さま。ばア様さまいてこふといふのじやが。夫おつていふ

か。ヲ、どう成なりといふはいやい。ヲ、／＼そんなら孫まごかくまふたと。六松むつまつを呼出よし。サア今いまのやつらがくると悪わるひ。こちの

子ことべ、着きかへた。ア、コレ／＼／＼こなたの氣きは違ちがふたかと。いふを押おへて耳みみに口くち。ヤア扱あはあの子こを。ア、コリヤ／＼

声こゑが高たかひ。ナ合点あてか悪わるという事こと浮世うきよにて工わざは嘸なや此理こゝり。とかくしつらふ其内そのうちに子こノ刻告ときつげる鐘かねの聲こゑ。

ハツト夫婦ふうふが胸むねどき／＼六松むつまつ奥おくへ押おやる間に。神主かみ兵部へいぶまつ先立まゆり。牲けいへの時刻じこくが廻まわるサア／＼渡わたせとせり(67ウ)立たられ。

コレ／＼ば、うろたへる所ところじやない。叶かはぬ事ことと覚悟かくごしや。コレ六松むつまつを渡わたします。孫まごよ。さらばと胸震むねふるひ。ちい様さま。ば、様

いてきませふと。いふ間まもなくなく引立ひてこそ欠かり行い。

かゝる所ところへ調子丸てうしじゆん多勢たせいを相手あてに防ぼげ共ども。宮みやに心こゝろの引ひかるゝ受太刀思うたいはず此家こゝへ馳はせこゝり。鳥取熊人とりくまんとこ追取おし卷まき。ヤア／＼逃にげても

逃さぬ。最前此家へ小躬を預たる条見届置。首切て渡すか。異義に及ば、垣生を踏破らん。いかにくと匍りしは遁れ方なく見へにける。

折よく出る六松が姿は直ぐに宮の形り。熊人見付て夫し遁すな。南無三宝と後に囲。よくく(68オ)見れば宮でなし。ヤアこはくいかにと心の転倒。サア遁れぬ所首討て早渡せ。さあく何と、詰かけられ。ハット計に心付。扱は此家も所縁有者。御身代りに衣服を着せかへ。爰へ出したは是討とか。ハ、ア忝しと首打落し。雲の裏迄も御供と存せしかど。御運つたなく候と熊人に指出せば。首受取て神妙く。ほうびに命は助けくれん。サア是からは太子が詮議。守屋公へ実檢にと家来引具し立帰る。

調子は吹出す玉の汗。天地を拝する輿よりも。孫よく。たつた今迄居ましたがと。夫婦うそく調子を見付。ヤアこなたはさつきのお侍。(68ウ)ハット二人が色違ひ。調子丸両手をつき。最前は急難を御救ひ下されしお礼は詞に延られずと。三拝する程うちくと手持不沙汰に猶うやまひ。最前のお子お返しと。いはれてきよつと又冷汗。サア其お子はア、どふやら。エ、つんとば、知らぬかおれが何のしろぞいのと。うろくきよろく死骸にばつたり行あたり。ヤアコリヤ六松が殺されて。ヤアく何と、夫婦はてんどう泣にも泣れず。血眼に成久間平。調子が骸の血汐を見付。むしやぶり付てヤイ侍。儕が着物の此血は。扱は六松殺したなど。いはれてそんなら身代りは。(69オ)得心では有ざるやと。思ひ違ひのとむねを納め。いかにも身共が首討た。ヤアと泣出す母の親。コリヤくくば、泣てある所じやない。こだくに刻めく。娘よくわれが為にや子の敵。爰へきて刻めくば、早ふ呼でこい。一步だめしと久間平。髪むしるやら引ずるやら。打つ

擲つせちがふ所へ。

ば、は欠出ノウ悲しや。娘は奥にいぬはいのふ。一ッへんさがして仏壇に。娘が小袖が血だらけに。おりやもふ気が氣じやないはいのトリヤくくく。ほんに娘が小袖血みどろに成て有。是はどふじやといふ小（69ウ）袖。調子丸も目を付れば。慥に覚への女房が着物。ヤア是を娘が衣類とは扱は生駒が実の親。久間平殿御夫妻か。ハ、ア未御めに懸らね共。其生駒か夫ト調子丸にて候と。名乗は二人リ又恠り。何とくく調子丸じや。ア、そふいやりや六松に生キうつし。コレく親仁殿娘が咄しの高頬のほくる。まがふ方なき婿殿じや。スリヤ拙者が手に懸しは。ヲ、預た孫じやはいの。扱は最前手にかけしは盼で有たか。六松といふ名に心も付ざりしは。ハアハツト計に胸せまりひたんの。涙せきあへず。サアくば、早ふ娘を（70オ）呼でこいやい。ア、是々お尋有ルなおりますまい。ア、娘はどふぞしましたか。夜前切ラれて死にました。ヤアくくそりや申々どふしてくと。目には仏も泣計。ホヲ、御驚御尤。近曾我君の御勘氣受。豊日ノ宮を預つて影を隠すわび住居。守屋方より厳しい詮義。舅の方を志。足よはの同道は。まさかの時の足手まとひと。女房を先へ遣し。一日後て通る道。小関が原の松の下。盜賊の所為と見へて生駒が死骸。ヤアそんならアノタへの女は娘で有たか。とはくくいかにと。摺寄ル夫。ヲ、まつかうくと追剥の始メ終りの物語。スリヤ最前きたは子（70ウ）をしたい。親をしたふこんはくか。譬幽霊なればとてなせま一度ま見へぬぞ。母かと一声いふてくれ恋しの娘や。なつかしの六松やと。母が歎は父親も。小袖と死骸に取絶り。押うごかして声限り。あやも涙の雨やさめ外は白雨のトしきり晴間は。見へぬ歎なる。ハ、ア御歎キは去事ながら。妻が最期は太子へ忠義。舩しは又天子へ奉公。御諦め下さるべし。扱尋るは太子の御上。ヲ、氣遣有な

御安体。シテく何国に。ホ、守屋が詮義強き故。拔道より紀の路迄只今落し奉る。ホツヲ、夫は重畳。某追ッ付見へ隠れ
の御供せん。(71オ) サア最前の若宮をと。云ハれてエイと三度のけでん。アノさつきに人身御供にやつたのが。宮様で有
たかと。夫婦どぶど腰拔せば。ナ、何と人身御供にやつたとは。申々どふしてく。ヲ、コレく此村は昔から。アレあ
の軒の白羽の矢がしるし。宮様とは夢にもしゝす。孫の代と聞より調子は七転八倒。立たりいたりじだんだふみ。西よ東
と欠めぐり。二人を投付にじり付。エ、いかにしらぬといふてソ、そうして問のない事。シテ其神の社はどつちぞ。追ッか
けて取かへす。ヲ、尤、おれが案内といふ間が選ひ。道はこうかと調子丸。せきにせい(71ウ) て行先へ。ぬつと出たる
縣の虎純。ヤア聞たく。誠の宮が首取て。恩賞受ると欠出すを。引ずり戻してもんどり打せ。宮も社檀も打みしやぎ。
宮様を取かへすと。てんりう夜叉の勢ひにて。棕の木原へと三重へかけり行。

雨のあし音太刀の音。そらには雷稲光つるぎの光り切むすび。追つ追れつ調子丸。虎純諸共おつほつ髪。棕の木原の落
葉をけたて。太刀筋しどろのくらまぎれ。踏すへれば付入て。互にうす手をおいの身の心きいたる振松明。猶をふりくる
一トしきり。でんくはう稲妻松明の。火ばなをちらして三重へ切む(72オ) すぶ。

久馬は松明ふり立明りに見付て。ヤア是は棕の木の洞が血だらけ。扱はもふ宮様のお命は悲しやなふと聞より調子。ハア
はつとよはる所を虎純が。こうぎに切込た、みかけ。すでに危く見へたる所に。ふしぎや棕のうつろより。はつしと飛く
る棕の矢に。虎純忽。息絶たり。

人々は悦ぶ内。古木の中に声有て。ヤアく旁。豊日の宮は御安体。聖徳太子へ御目見へと。ずつと出たる其姿。小手

脚当すねあてに身みをかため。其様ウけたかき勇士ウツの相そう。棕ナラスウの丸木ゆんづの弓杖ゆづつき。人見ひとみの平馬へいばが首引くびひさげ。御連枝ウ供奉れんしぐふし（72ウ）立たたるは。あたりをはらつてたくましき。

久間平地色ハルすかし見て。ヤアわりや色粉この五作ごさくじやないか。ふた方かた様も御安やす体。スリヤ悪わる者ではなかつたな。ハ、ア嬉地ハルしや落おついで。安堵あんどの思おもひは雷かみなりの。よそへ落おつたる心地こころ也。ホ、ウ勘当かんたう受うればあらず。ぞく性しやう語ごらん能聞よれよ。父は大内しやうの正ただ。北面ほくめん。跡見行安あとみぎやうあんがあらず。跡見あとみの赤禰あかぬいとは我事わがこと。某若冠じやくくわんの砌父せきふ諸共しよご勅ちやく勘蒙かんもうり。流浪りゆうらうの身みのよせ所。久間平くまへいの養子やうしと成暫なほく時ときのいたるを待まち。然しかるに守屋しゆゑが悪逆あくぎやくにて。聖徳太子せいとくたいしの御みちんらくと受給うけくわいはり。何なにとぞ廻まり逢奉あり。一つの（73オ）功こうを立たたる上父かみちちが勅勘免許ちやくかんめんぎよの願ねがひ。忠勤ちゆうきんをつくさんと野楽のら遊あそびに人ひとをかたらひ。味方あじかたに付つく軍勢ぐんせい催促さいそく。こよひ雷いかづちはつすすべき天文てんぶんを考かんがへ。性せいへと偽いつはりつて六松むつまつを奪取だつしゆしも。まさかの時ときの心こころあて。御身みみ替かりと思おもひの矢先やせん。忠義ちゆうぎの弓ゆみに取とりて。念力射中ねんりきあたる。豊日ゆほうの宮みや。追おつてを逃のがれ思おもはずも此洞このうらへ御入みいりは。則すなはち諸天しよてんの御助ごすけ。又また忍しのぶといふ女むすめ。せんぎせよと敵たかの指図さしず。色いろにもてなし実否じつふをたゞしお命助いのちすけ奉たる。我忠わがちゆう心こころは神かみならで人ひとにもらさぬ人見ひとみの平馬へいば。御落先ごらくせんを追おつかるつゝあてぼつ詰首ねき拔ぬきは。是軍このぐん神かみの血祭ちまひと首投くびな（73ウ）出でし。多年としの本懐ほんかい一時ひとときにたつし。尊君そんくんにつかへ奉たるは父ちちが悦よろこび身みの大慶たいせき。ハ、ハ、有難ありがたし恭まことしと心詞こころごもするどき矢先やせん。守屋しゆゑを一ひとつ矢やにいておとす。後のちの誉ほめれぞいちじるさき。調子丸てうしす、み出で。只今ただいま赤禰あかぬいの詞ことばのごとく。今朝けさ初はめて対面たいめんに忠義ちゆうぎの心こころあかし合あひ。追手おしをふせぎあらず御身みみがはりに立たたるは。御みせいいうんの開ひらくる所宮ところみやをあつかり奉たる。御謎みまの御勘当みかんたう御みめんの御み証あかし蒙あらば。死したる生駒なまがが未いま来きたより。俱ともに悦よろこび申まをさんと頭あたまをさかげてながひける。太子たいし御み気色きしきうるはしく。久間平くまへい夫婦ふうふを始はとして。赤禰あかぬい調子てうしが忠義ちゆうぎの程ほど。（74オ）かんずるも猶余なほあまり

有。元より謎の勘当なれば。赦に及ず本の主従。不便やな妻や子は丸取命を捨しとや。老て子に別る、程悲しき物はなしと聞。心年を思いやり落涙と、め兼ねずと。世に有難き御仰。人々はつと恐れ入。コハ勿体なき御誕やと。共にひれ伏泣計。赤禱はわざと声はげまし。君は世上のしづまる迄。此椋の木が御隠家。調子は疵を保養有。二上が獄には妹子の臣。守屋といども戦ふ由。兼て味方に付おいたる。諸職人をまねき寄。すぐに加勢にうつ立んと。弓矢追取引しほり。切てはなせば相図ののろし。木ずゑにはつと立のぼる。程なく寄くる大工の(74ウ)棟梁。甚五郎がまつ先立左官やね屋を初とし。木挽かはらし鍛冶鋳物師。はこ屋建具や具足屋何ぞ。数もかぎらず職人尽し。我もくと詰かくれば。久間平はいさみをなし。我らはもとより桶やなり。加勢の人数に加らんと。甚五郎に押ならび。先陣にこそす、みけれ

太子御悦喜浅からず。丸が大願成就せば。諸職人の司にそれくの。官名受領をさつくべしと。仰に久間甚五郎ハ、有難き御恩。大工は差詰匠の頭。桶屋はたがのゑんを取近江の掾に極た。ヲ、く左官はおずさ上総の掾。やね屋は雨を大炊の掾。鏡は(75オ)神の御影成伊勢の守とも召るべき。

のべ屋木地やのろくろ引。ひくや白目の神楽の鍛屋。鋳や立る其中に。てつべき碎勢は。かぢやのてこの衆てつからり。ころり。てんくからりの相槌を打に。打物めいくしよざいの得て道具。もとはやきはのやきもの成ば備前の守とや名にしあふ。

皆それくの受領を名乗誉を上る二上嶽。ぢいとば、とは孫や子を。又思ひ出す浮涙。勇心も跡へ引。さすがは老の後髪おくれを見せじと調子丸。赤禱がいさむ懸声に加勢も勇勝軍。文字は其儘勝軍寺下モの太子と尊て。河内ノ国の椋の木に

隠れ名高き御縁起は来世の。今に有難き（75ウ）

第四

羅網の鳥は高く飛去ル事を恨。呑江の魚は上を忍ばざるを歎といへり。守屋大臣仏閣を焼払用明天皇獄屋に移し。うはべは崇俊を位にす、め心は己が王位の望。四海に羽を伸其行粧。明日をも知ラぬ月卿雲客犬面大学初として。お傍さらすの佞人共。袖をつらねて伺公する。

折もこそ有レお次より。秦川勝出仕也と。奏者の声も諸共に花は桜木。人は武士。誉れ輝。川勝に。連レ添名さへ月益と。

妹子ノ臣が乙娘姿の立木のしくと。松の間よりもしとやかに。夫トに替る襦の。内（76才）ぞ床しき女房也。

犬面大学声を懸。川勝の出仕とは。月益お身かと。尋に手を突さればいな。此間より夫川勝。出仕せよとの御使なれ共。風邪に抱され立居さへ勝ぬは病の業。御意重ければ私に御用承はり帰れとの事。夫レ故是非なふお叱も省ずと。笑顔作つてことほる中。

守やノ大臣寛々と打眺。ムウ病気で有ふが腰がぬけふが。畚に成と乗つてこよと云付る筈なれ共。我弁舌で事分ば赦し呉ふ。ヤイ月益。今四海を掌の内に納。崇俊天皇を位に付。仏なぶりの用明天皇獄屋にほし込。三種の神器玉世の后が有家を責問。聖徳太子を討取レよと。政道を計ル（76ウ）此守屋。汝が目からは善と見ゆるや悪と見ゆるや夫聞ふ。サどふじやく。ハア是はマア改つたお尋。善悪は君こそしろし召れふすれ。譬十分悪にもせよ。随ふが臣下の習ひ。ほんの水は逆様に流れぬとやら。ム、シテ又そちは親が大事か。夫トが大切か。アイ親の内に有つては両親に仕へ。嫁しては夫に随

ふと草くさ双紙じょうしにもついで有事。おなぶり遊すお詞か。ホ、くくくと多しやくする。ホ、さすがは妹子ノ臣が娘でかいたく。尋るは余の事ならず。妹子ノ臣構たてこもる二上にじやうが嶽だけの要害ようがい。麓ふもとより大手の木戸。攻口せめ迄はいか程有と裏間うらま(77才)か、れば襟ハルフシかき合あ。そも此城地中の道法は。直に上れば僅わずかに一里。まさかの時の要害ようがいに。坂道ヒロイウ四十七曲。敵寄よこやても横矢よこやにて。そうなふ近くへ寄ぬかため。シテ兵糧ひやうりやうの用意はと。大学地中が差出口。アイ元より二上ハルが嶽だけといふて。峯ウは二つに通路つうろ能う。一つの峯みねを本し城しやうと定め。一つの峯みねには方十五町の蔵中をたて。其内ウに兵糧ひやうりやう充みと。聞こてぬからぬ守屋ウの大臣。ム、水の用意はいかにく。二つの峯みねの其間そのまに。絶たへず流るゝ滝キの水。四季折々の眺望てうぼうは五畿内一めに見おろして。どふも云れた物ならず。殊更地中父は牡丹ぼたんを愛あいし。今詞がてうど(77ウ)花はなざかり。ア、君地中にもおめに懸かりたいなと人の氣に入口上手ハル。さつはりとくた川勝カハに移る月益フシ遺也。

守屋地色ウはくく打点うなづきコリヤうかつには勝かたれぬ。熊人くまんが軍サの注進しゆじん。早はやふ聞たしくと。見地ハルゆる折ししもあはた敷敷。討手うちての大將たいしやう鳥取とり熊人くまん只今凱陣がいじん仕つかると。呼次こゝろ声こゝろ々々ソレこなたへ。早はやふくといらつに随したがひ立た出る熊人くまんが。妹子むすめ臣しんにばいまくられ。鎧ウ直じ垂た溢あしほたれ。顔かほも得え上あずしほくと。武者溜ウツにうづくまる。

守屋地色ウ大臣だいじんつつ上立あがりり。ヤアいかに熊人くまん。軍サの次第しだい早聞はやきこんと。せきにせいて立たか、れば。負また咄つづしを咄つづせとは。去いとはつらいともぢくうぢく。サアくどぶじやとせり立たられ。ハイく。イヤ是大学この。よいかげんに取と繕つくろひ。お咄つづし申まて(78才)おくりやれさ。ハテめつそな。人の軍サの勝負かちまをどふして咄つづが成物なりもので。よかれあしかれ直ちキキ々々にと。云いハハれて是非あも天窓あまかき。しよげに成なてぞ語かたりける。扱とも去いる。曉あかつに。五千余騎いんそを引率いんそし。都みやこを立て雲雀山ひばり。雲とにも上ある。勢いきほひに。いな、

き勇駒の足逸参に馳させて。其夜は麓に陣を取明るを遅しと待居たる。

敵も覚悟と白波立かの。谷川のこなた成峯をへ隔て叩へたる。

妹子が軍勢三百余騎瘦たる馬に縄手綱思ふにたがはぬせいの分際。一々に首切かけ適御感に預らんと。逆巻水に此熊人馬を

ざんぶと打入る。

跡に續て味方の勢。橋より下を一文字に。ぬいぬい(78ウ)声して我先にと。向ふの峯へかけ上り。おめいてか、れば妹

子が勢。むら／＼ばつと逃散たり。ヲ、気味よし心地よし。定めて汝ほつかけて。二人シの駈を討留たか。イヤ。／＼／＼

何のそうで御ざりましょ。其逃ケたのは術共。知ラではまつた落し穴。多くの軍兵ころ／＼。あつちは名にあふ芋頭。

こつちは負た計芋。

某駒を立直しもみにもふで追事は追たれど。亀井赤井といふ兄弟。謀のわなを掛。險岨の木影に勢を伏。拔道よりは投松明

高やぐらより油をかけ。山は一めん焦熱の地獄の絵図にこと成ラず。つかれし味方を取り巻んとときをつくつて欠出る。思

ひ懸なき事なれば。一トさ、へも支す。あわてふためき逃(79オ)たるさま。か、つたなりではござりませぬ。

其時に此熊人駒の足を立直し。逃るを敵から声かけて。返し合わせて勝負せよと。いへども耳にも聞入ず。臆病風にさそ

はれて覚へず渡る谷川の。算盤橋に押落され。にちちもさつちもいごかれず。三五の十五。あたまのはち。敵は見一むしや

う切。味方は二二シが死人の山。漸遁れて此通。命から／＼逃帰る。面目もなきお目見へと。頬真黒に熊人が。誤り入た

る風情也。

犬面初メ伺公の人々。計り兼たる守屋が機嫌。青ふ成赤ふ成。せきのぼしたる努の面色よし。此上は用明天皇引出し首刎たりと聞カバ。太子も玉世もとこぼへ廻つて出てう(79ウ)せふ妹子めもてんどうかはき。二上が嶽をぼいまくるに手間入まじ。ヤアく者共。天皇を引出せの声に随ひ大学熊人。獄屋開きて引出す。御痛はしや。天皇は。臣下の為に罪せられ。日の御神の御末さへ。暗き獄屋は我国の。暗き御身の不徳ぞと。思ひ引れて出給ふ。月益見るよりハツト計。欠寄らんにも守屋が手前。只何事も世の成行思し明らめ給へやと。涙に呉れて奏すれば。ヲ、やさしき女が志。天照す御神にも見放されたる此身の上。斯浮めをば見せんより命を断やと御声に雲がち成宣り。ヤアく成ラぬく。其浮めがくる敷ば。三種の神器。太子玉世が有家を白状。ア、愚な事をいふ者かな。譬いか程責る共。知ラぬ事が云ハれふか。天神(80オ)地祇も照覧シ有。偽りならぬわが詞と。仰にうそむく大学熊人。左右より御手を取。サア白状。くといぶせくも。盜賊なんどをせちがふごとく。見るめにつらき月益が。あせれどせん方情なくすでにかうよと見へたる所へ。俄に出仕の秦ノ川勝。来か、り見付飛んで入。直クに熊人棒捻なげ。横に捻れてころくく。犬面砂に狗まぶし。天皇困ふてつ立つたり。

ヤアこちの人。ござんしたかと小踊に。二人はほうく起上り。ヤアく川勝。此間より病氣と偽り。出仕せぬは太子へ味方。天皇と同罪と。切刃廻せば気色を正し。上一人より下万民に至る迄。君に敬ひ下を憐むを以上下甲乙の分を別つ。其道正しからざれば(80ウ)深夜に灯火なきに似たり。此川勝は作病といふ病に犯され。昼夜心を痛る是全く君臣の礼を重んずる故さ。今幸イに病平癒密に参ッて見るに忍びず。妨するも君の為。用明天皇害し奉るべき謂なし。我君御所存

有ツてかと膝元ひざもとにむづと座し。顔打守れば居長高みだけ。ヤア天地開け始つてより此方。神国の道みちをすて仏法ぶつぽう帰依きゑする用明天皇。神敵国敵の首。勿なほるが誤か。ハ、ハ、ハ、神の代去つて全世二代。草木国土虫垣こくどひしうぐ々に至る迄。君しなに随したがふ和国の風義。何が不足で日本をくつがへす御心みこころ有ふぞ。仏法ぶつぽう流布りゅうふは万民を憐あわれみの御余り。是以太子に罪つみなき事（81オ）明白。我慢心がまんしんに身を高く。あらぬお人をだしにつかひ。底意そこみに一物有事は黒い眼で見つて置た。コレお傍そばに付添ついで倭人原わいじんに耳をねぶられ。強悪がうあくに御身をそこなひ。果は浅ましひ御行末みこゆひなげ。善ぜん心に立帰つては給はらぬ。法はふを導みちびく太子たいしに帰依きゑし。用明天皇を尊敬そんまう有。天下第一の忠臣と云ハれてたべ。コレ我君。川勝かわかつが手を合あすと。諫いさめつ泣つ様々に誠を尽つす忠臣しゆんのあつき。涙なみだぞ頼たのもしき。守屋もりやくはつと逆立上り。ヤア役にも立ぬ吼うへつら。弁舌利口べんぜつに云いまげても。太子たいしめが仏法ぶつぽうにこと寄日本をくつかべす。謀反ぼうはんの証拠まうこは異国内通いこくの書翰しよかん。但し此云ま訳有ありや。サアく何と、無理無体。云い廻まわしたる主ぬしの（81ウ）權威けんゐ。ハアくくと女房にようぼうが胸むねもとどろく計也。

川勝かわかつも暫しばらくしが程。黙もくして諾いつらへもせざりしが。ハ、ア適々あてあ。上かみ一人の非ひを改あらためずんは。下万民の政道たうだうは正ただされまじ。神国の正統しやうたうを立。崇俊しゆじゆん天皇御即位みそくゐ有ありしは少しも君のひが事なし。此上はならく迄も我君に成替り。科極かごくりし聖徳太子。尋ね出して首討が我忠義。哀あはれ用明天皇を御預下みよくださらば。やがら責はねに骨ほねをひしぎ。神宝。太子玉世たいしが有家。尋ね問とのが詮義せんぎの近道。イ、ヤわが近道吞込ちんこんぬ。スリヤ夫トをばお疑うい。ヲ、汝は妹子ノ臣が娘。ム、敵に縁を引たる故。内股膏藥がうやく大学ぬかるな。熊人くまにんそふじやと。三方四方さんぽうが焚たき付なる。顔せめんは赤面せけん觀念くわんねんの眉毛まゆげ八苦はつこに川勝が。疑うて受うて生なまきがいなしと。刀取たうと（82オ）手に絶たぎる月益げつえき。取とて投なたる色いろを見て。川勝待。なぜお留とどまさる。イヤサ用明天皇預り度よめりどば。一つの功いさめを立て願ねがへ。ム、して又一つ

の功とはな。ホウ妹子ノ大臣二上ケ獄の城に籠り。討手を遣し攻さすれど。要害におどされ逃帰る猿松共。是より直に彼地へ立越。妹子父子が首取て。二心なき功立ば。用明天皇預てくれふ。ム、然らば討死せし時は。いふにや及ぶ天皇はかき首。軍に勝ッて預り成共。討死して殺し成共。そちが心に有事と。のつ引させぬ主命に。ハツト思へど色も変せず委細畏奉ると。領掌すれば打点き。ホウ然らば是より直に打立。首途の賜せんと。采配を投出せば。

コハ有難しと押戴。たとへば妹子ノ大臣が。孫呉が術をふ(82ウ)るふ共我レ又孔明漢信が肺肝に分ケ入て時刻移さず功落すは。掌に候と。詞を放つて申にぞ。コレナフ夫レはと月益が絶れば当身の悶絶を。見帰りもせず逸散に館をさしテ三重へ名に高き。

二上が嶽の城郭へ守屋が討手秦ノ川勝向ふと聞に。小野の大臣妹子の嫡子亀井ノ介。同次男赤井ノ介。緋緘の鎧投懸手勢したがへ固たる。内は牡丹の。花盛り。父の妹子は大庭の花に粧ふ駒下駄の下を。まわりし嫁と嫁。花壇の草も。御機嫌も取々手伝ふ有様は。軍の中の優美也。追手の方に鯨波。稲目の玄番走り出構の板へちか寄。早ヤ矢合候と申上る。兄弟(83才)表をきつと詠。其食をはむ者は其器を損ず。其樹を影にする者は其枝を切ずといへり。六天魔王の守屋に組する討手の大将川勝が。首提げんと床几をたつ。兄嫁市ノ戸箒掃さしナフ妹。けふの討手は兄川勝殿。いかに主命なれば迎。現在の舅君。討手所しや有れまい。アイ姉様のいはんす通。妹聲にはしんどさせ。妹には案じさせ。あの兄づらの川勝殿。にくらしさよと面々の。夫々が太切と。兄の討手のゆるせなさ。おと、ひ胸をぞいたためける。

亀井兄弟詞をそろへ。ヤア縁者は愚。敵味方と引別レ用捨有ふや。太子に一命差上ケたる。親子三人。死る事珍らしからず。

夫レ程兄が大事なら勝手に帰れとつ（83ウ）かふどに。云ハルれてはつと氣を取直し。何のいなア。親兄にも見替る夫ト。性根乱れはしませぬと思ひ入て張持ば。

妹子臣手をとめ。太子に捧ぐる命こそ仏法弘通の柱立。命惜な追まくれ。ハ、仰にや及ぶべき。死を一決に固たれば心能キ戦ひやと。笑を含で兄弟は。手勢引ぐし逸散に。追手は向ふそ勇しけれ。跡に二人の。女房と女房。胸もときつく鉦太鼓。のび上つても舅の前。夫トの詞おもければ。花の掃除の竹ばうき。杷も手には付さりし。ア、さすがは舂共いさきよいでかすく。敵の多ひ花壇ほつと草臥ちと休ふ。ハツト玄番が片付る。二人の嫁が掾先へ。ふとん敷やらたばこ盆。（84オ）心よげに。ほやく笑ひ。

実一時の楽しみに千歳を延る諺。土によこれ心氣をついやす程有ッて。一畝くいさましい花の勢ひ。又いさぎよい舂共か勢ひと。蚊の鳴如く八方に。響わたるせめ鼓。ちつ共動ぜぬ大丈夫。きせる相手に見とれたる。ゆたかさ猶も不敵なれ。

其間見合すおと、いが。中にはさんでコレく玄番。アノ戦ひは敵方が勝そふなか。こつちが勝か中取て。ひいきなしにいふて見や。詞さく乱杭逆もぎ押破て。木戸際近く攻寄せても。かつては知らず道は知ず。途方に迷ふ守屋勢。山に馴たる味方の勢。勝鬨上るは今の事。お氣遣なされなど。いふに落付姉妹。少し胸も（84ウ）休まる所へ。

使番の武者罷出。寄手の大将秦ノ川勝殿より御使者。妹子様に直談迎。門外に扣られ候。通し申さんやと窺へば眉を顰。髻舅は私事。敵味方と立別れ然も戦ひまつ最中。川勝よりの使者心へず。軍中に酒を送るは礼受るは法也。其使者是へと詞

の下。衣厨長持狭箱。琴箱御厨子黒棚迄。掾側にこそならべけれ。使者には有で。月益が。明の光もおほはれて。外に頼みは七光。親の顔見る姿迄やつれて爰に入られば。

市ノ戸目早くお久しや。月益様。妻絹もわたしもちと見廻ふと思ひながら。知ッての通り何じややら。互に隔たるむしやくしやだらけ。家中も無事におり(85才)ますかと。いへど返事は巻込し。と、様それをと差出せば。ホ、娘そちは去れて戻りしな。アイ。あいとむせびて差点むく。ヤア／＼夫レはと驚く兄弟。コリヤ月益。敵味方と引キ別れた故去ったよな。サア現在の親二世の夫。ホウ川勝は舅の首を取心か。サアそこを思ふて去れた悲しさ。ム、然らば縁を切ったるは。降参せふといふ心か。サイナ堅くせに意地有夫ト。髻舅の縁切ば合戦するに刀ヲ有。誠夫トに添度ば妹子にとへとすげない難題。川勝殿に添様に。思案してたべと、様と手を合れば打笑ひ。適川勝は智仁兼備の武士髻に持しは我誉と。自慢せしも鵬(85ウ)の髻。日本一の大だはけ。娘をかへさは愛憐に迷ひ妹子が鋒先キよはるか。但し味方に付るか。麦飯で鯉を釣内股者。日鏡遣し猿松侍。大事の娘は添されぬ。氣遣すなれつきとした髻取ぞと。つよい詞の恨めしく。エ、聞へぬ事をおつしやります。飽も飽れもせぬ中を義理にせまつて去れし物。又の殿御を重ねふか。お前にとへと一言を力に思ふて遙々と。恥を凌で参りしも。川勝殿に添たい計。去ッたら能はで済すとはむごいつれないお心やと。思ひ詰たる女氣の用意の懐剣迫取ッて。自害と見ゆれば三人が。是は短氣ととゞめても。イヤ／＼／＼放して殺して／＼と。訳も(86才)涙に伏しづむ花壇に露やむすぶらん。

妹子の大臣優然と。左程川勝に添度は此親が首を討。エ、ハテ身にとへとは首討テとの謎。昔々はいさ知ず。娘の縁組致ふ

とて首やる事マアならぬ。一家縁者の名に引かれ。軍を得せぬ川勝ならば。了簡の付々様有。市の戸。妻絹隙やつた。エ、イ。イヤサ舅が去った出て行と。藪から棒のあたり眼二人恠りせき立色目。何誤りに去ったとは。曲もないどうよくやと。云せも果ず。ホ、ウ胴欲と思はゞ。兄川勝に問て来い。エ、ソリヤ余りむごひ。兄と一つでない私ら。お前も常々よふ御存。サレハサ。そこが敵味方よ。組討に用捨する川勝。もし（86ウ）戦にたるみなば躬共が世上の嘲り。川勝があほうの相伴罷ならぬ。去ったく出て行に。返す詞も泣入ル姉妹。月益も猶涙。ひよんな座席に稻目の玄番。葬礼の出た跡へ医者の見舞しごとく也。

心有げに妹子ノ大臣。しつゝ庭におり立ッて。嫁々娘。爰へくと花壇の牡丹折取て。コレ此花の。白きは太子赤きは守屋。一つ花壇に咲乱れ。鎬をけづる敵と敵。白きは兄弟赤きは月益。娘と娘が勝負の鋒先。此花壇は軍サの場。打合ていづれでも散たる方が一生寡。勝た方を縁組さすと投出し。何やら物の有ぞ海。漕分ケられぬ捨て小船。かい（87オ）なき花に氣をとむれば。ア、レく軍まつ最中。花の勝負が軍サの勝負縁定め。思案して夫婦になれ。玄番。荷物取入よと心へ残して入にけり。

跡は三人うつとりと。案じ入たる計也。申月益様。おまへの傍杖妹やわしがきつい迷惑。花の勝負に勝った方を。添してやるとおつしやつたが。お前はマアどふ思はんす。さればいな。とかく夫トに添たいが常。是で勝負して能事やら悪ひやら。妻絹様の心はどうぞ。ハテわししや辻仕様がない。マア舅御の仰の通。三人是で打合ては。ハテ何をいやるやら。大事にしとてさへ散やすひ此花。落花すると夫トに添事がならぬはいのふ。三人寄ば文珠の智恵有りたけしほつて（87ウ）見さしやん

せと。鼻突合す折も折胸轟トフシカす鉦太鼓。エ、大事の思案が出懸つたに。鯨波で引込だ。こちの人に怪我はないか。こちのは無事かまめなかと。一つ所に紅白カウハクの花も小首をかたむける。

かゝる所へ里脇軍蔵息を切つて欠来り。今日の戦ひ敵一陣に欠通候所。山道難所の勞れ武者と味方の油断案に相違。乱杭逆茂木踏破りたんべい急に攻入て味方のはい軍。御兄弟様踏留まり。多勢を相手に御働ウツき。事危く見へ候。追々注進御座有べしと。申捨て引かへす。

市の戸妻絹裾引上。かけ出るを月益引留。と、様の花の返事を捨置ウツて。(88オ) コリヤ軍場へ行のじやの知れた事いな夫の加勢。ヲ、そんならやらぬ待しやんせ。ム、聞へた。兄川勝の勝すそふな軍と聞。女の加勢も心憎ココロふ夫ウツで邪魔をさんすのか。ヲ、知れた事兄々達の負軍。川勝殿に手柄テガさせ。わしが女夫に成はいなど。払へば引ずり行は引退。争あひとむる其中へまつしくらに平坂兵太。大息つげば立ウツかゝり。夫トはいかに。くくくと氣をせいたり。さん候御兄弟。多勢が中へ割て入四角八方めつた切はたりくくとくたばり伏。残る軍兵追詰く。川勝が首取んと踏破つたる勇猛力。追付敵の首提勝ヒツ関上トキて引給はん。戦急ウツに候と申フシて欠り行。

月益たまらず欠出るをどこへ(88ウ) くくと二人が引とめ。舅御の花の返事を捨置ウツてこな様も軍場へ。ヲ、しれた事夫トの加勢。ホヲ、そんならやらぬ猶ならぬ。エ、めんどうなともぎ行を。とつこいやらぬと兄弟が中に小挟はで牡丹花の。枝にて打ば丁ど受。今と、様の謎の花。まつ此様に打合も。夫ト々のかせいして討死せいとはんじ物。こな様連も敵の妻。ヲ、こなたもと打かくる。花の切ッ先女の手先牡丹の乱。上段下段。花を散ちらしていどみ合。

亀井介は大わらは五体に立矢は蓑毛のごとく。甲トも終に打落されよろほひながら掾がはにほつと一息つぐ有様。ナウ悲しやと三人が。諍ひやめて取廻し疵を介抱。いたはれば。ヤア親人はいづ(89才)くにぞ。今日只今落城の時節到来。親人くくと大音上て呼はれば。

妹子の大臣ゆるぎ出。ヤア躬深入して手を負たな。落城すべき謂なし。いかにくと尋れば。さん候兼て軍慮を碎れし味方の計略敵へ洩。釣堀釣岩落し穴。算盤橋も徒にことく切落され。兄弟やたけにはやれ共運に尽たる此深手。か様に術の洩たるは内通の肝者有。もふ此上は龍に翅有逆も叶はぬ。御生害の御くび敵へ渡すは一期の不覚。御介錯仕り尊骸隠し。兄弟死出の御共せん。いざ御切腹遊ばせと。詰ればわつと二人りの妻。妹子臣は溜息ほつと。初メて驚く気色なり。(89ウ)

月益父のそばへ寄。兄様のあの矢疵。養生した終本腹。川勝殿に託言をと。云ハせも果ずくとねめ。ヤア云ハれぬ女の鼻の先。すつ込ておれと呵付。サア御最期の御用意と。すゝめる詞に手を拱。暫し諾もなかりしが。ハ、ア迷ふたりく。当時草木もなびく守屋の威勢。誰レかは用ざるべきや。某一人云ハれぬ我を張。露霜と消る太子を守立んと。忠義だては此身の菱。今より心ひるがへし守屋へ降参致す共。よも誠とは思はれじ。命助る便といふは。川勝がまたしも頼。髪を剃。世を捨法師と成つて命乞せば。助くれぬ事有まじ。月益あたま剃てくれと。お(90才)もひ懸なき一言にあきれて。顔を打守。イヤ申親人。只今の御詞よも誠とは思はれず。子細有んと疑へば。ヲ、今迄は適血気の兄弟に。鉄丸を以て固たる此城郭。中々落べき様なきと。思ふての空頼み。咸陽宮も一時の烟。時節の来るを知らざりし。おことらも俱々に命

乞を願へよと。真実見へししかみ顔。ヤ夫レは一定か誠かと。こぶしを握り問詰れば。ハテ名を取ふより命の徳。坊主に成つても助りたい。呵てくれな亀の介。サア月益隙取は後手に成。早ふくといらちける。

月益悦びアイくく。幸わたしが鏡台の剃刀盥取出し。よふ思案して下さんした。法体しての命乞何の討ふと云ハれ(90ウ) ましよと。六つ用意手合せし。刺にか、れば亀の介。イヤサ是。血迷ひ給ふか親人。あらゆる書物に書載た。仁義も道も能御存知。千万無量のお諫めも。某が申さず共。お心に皆御存じ。降人のならひ。縄目の恥に遭ても。其命が助かりたいか。イヤサ。是程いふが耳へは入ぬか。実正誠に。ホイはつと計に腰も抜。齒を喰しぱり居たりしが。エ、天魔の見入か浅ましや。そも籠城の初メより。金石と堅たれ共。日本は八分守屋に随へば。終には攻落さるべき兼ての覚悟。けふや落城。あすや親子立ならび。日ノ本無双の鏡と呼ばれ。末ッ代名字を輝かさんと。思ひし事も水の泡。人は一代名は末代。臆病人畜の名を取つて。是より末にいか程生キ(91オ)る御心ぞや。其くさつた根性を知らなんだが。エ、口惜ひはいのく。親を助けるこそ子のならひ。親に死ねとす、めるは。忠義ならで云ハれふか。世上の人が指ざして。アレくくア、生キ畜生人でなしと。譏笑ふが情ない。御心を翻して下さりませ。コレ父上。申々。是程に申ても聞入ないか。エ、情なき御所存やと。或は怒り或は恨。無念の涙はらくく。市の戸妻絹諸共に道理に。伏て泣いたり。月益聞兼コレ兄様。切角お命助る綱。髪剃しやんす妨入。親に死とは氣強ひお人。ヲ、儕レは一生泥水喰へ。サア父上。ヤ親人。サ、返答何と、縁側も碎くる計に打た、き。我身の疵の痛は忘れ。父を上げます孝心義心。父はましくら咽ならし。(91ウ) もふ半分刺たでないか。今更止ては半分坊主。半分は毛の有ル妹子。是で世間が成物か。構はずと皆刺々。

地ハル アイくくと月益が剃刀早々に剃なせり。

地色ハル 亀井はじだんだ足ずりし。もふ親でも子でもない。勿体なけれど勘当じや。エ、見るも中々穢はしと。いふより早く首か

き刀。腹へかばと突立る。ナフ悲しやと取付する姉妹。ヤア寄ルなく。コレ今忠臣の亀井が切腹。くたばるを御覧じて

も。卑怯未練は直らぬか。ヤ。ヤエ、く。こなたはなア。女房吼な。妻絹温きゆるな。赤井ノ介も追ッ付最期。親と一

つでない。天道への云訳と。突込刀。きりくくと引まはす。

折も折赤井ノ介刀を杖によるほい来り。ヤア親人(92才)はいづれにぞ。最早生害逐られしか。暫く支申せ共。早川勝が

込入たり。亀井殿。兄者人と呼はればむつくと起て。ヤア弟遅かつた待兼た。ソレ。其さま見よ。ヤア何故の御法体。ヲ、

姿をかへて降人の願ひ。サテハ今迄優美と見せかけしは。軍サせまじき臆病か。髪を剃降人に出。命助らんといふ下心か

エ、。情なやと赤井ノ介。膝に膝を詰寄れば。ア、弟いふなく。アレ我子の切腹見ぬふりする。腐ぬいた底意を見て。

モ、、何もいふな口づいやし。サア一刻も早く。死出三途へ伴はん。ハツアいか様。兄者人の諫さへ聞入なきに。某が

云フはむだ事と。いひ様刀取直す。覚悟しながら妻絹(92ウ)が叫び絶るを突退押退。サア兄者人。冥途の御供仕らん。

ヲ、いさぎよし弟。イサお来やれとふゑはね切。かつばと伏ば弟も。後し物と切ッ先を。口に加へて真逆様。鉾先は襟へ

抜通り。廿五才と二十一目を驚かす忠死の最期。二人の妻はひしくと。空骸に縋り付。身もだへ叫び。伏転び前後。正

体泣しづむ。折から寄くる大手の勢。畏をつげるがいかのひゞき爰に聞へて三重へすさまじき。

透もあらせず秦ノ川勝。藤縄目の大鎧五枚。甲を猪首に着なし。軍勢したがへしづくと。打通ッて大音上。ヤアく妹子ノ

臣は伺国に有。守屋公の嚴命にて秦川勝向ふたり。見參やつと声懸られ。すんぼら(93才)坊主の妹子ノ臣。月益が介添にて。すごく庭へにじりおり。

川勝が前に手を突は。恠りせしが詞なく子細あらんとためらへり。ホ、某が此姿御不審は尤。守屋公の威勢に背き瘦家をはつて刀身立。とち籠たる我不思案。先非を悔今更夢の覚たる如く。斯髪をおろしたれば最早此世になき者。何卒婿舅のよしみ。命助けて下さらば有難からんと額を砂。月益相に相槌のうち討る、はさつき事。兄々二人は早切ッ腹短気な衆の了簡とは。一段越た粹など、様もふ堪忍してお命を。助けて上てくださいせ。コレ婿殿宜敷御推拳と。土にひれ状願ふにぞ。

川勝は猶恠り。何早兄弟(93ウ)は切腹とや。ハツエ、生捕んと思ひしに残念く。シテ妹子殿は坊主になり降参して助命の願。イヤサ子共は切ッ腹したれ共貴公計は降参かと。穴の明ほど顔打詠め。采配からりと横手を打割れ。果て見へけるが。

気色を正して。イヤコレ降参と有れば命は助る。併繩かけ御前シへ連行が軍サの法。いざ腕をまはされよと。無念をかけて占とへば。兎角宜しうお頼と。手を廻したるふぬけぼうず。にがり切つたる川勝が。後へ廻る後より。ヤアく川勝。腰抜の妹子大臣繩懸るに及すと。呼はり出る稲目ノ玄番。能々見ればヤ貴殿は。ホウ某は綾の弾正(94才)直駒。此城内の要塞窺ん為とくより忍び入込所。川勝に討手の役もし智舅の縁を思ひ。戦ひに猶予せば貴殿共に討取よと守屋の公の御内意。城内の勢悉く我味方に加りて。今日の裏切も皆某が謀。臆病卑怯のいもほり坊主。繩懸るにも及ぶまい。是より直に追扱ひ成共養成共勝手次第。此度の恩賞には願ひの通用明天皇預る間。神宝并に玉世が有家きび敷詮義仕れと。急度申付

べしとの御書翰。かみこなして其元に吞込す様な大手柄は。小舅へ頼みの印。エ、聞へぬぞや市の戸殿。度々（94ウ）文で詢共ついに色よい返事もなし。此城郭へ犬に入ッて裏切したもそもじを我手に入りたい計。此通り守屋公へ申上追付鼻が御内室と。人の歎を得手かつて。川勝喜悅の眉をひらき。用明帝さへ預らば。神宝玉世の詮義も追付。我願成就と悦びの中。追付参内有レよかし。扱々思ひの外な臆病神。太子が為には貧乏神と。妹子を立蹴にけのめし。軍勢引つれ立帰る。

跡に兄弟めくばせし。夫トの遺言爰也と鏝くつろげ詰かくれば。ヤア命助らんと坊主に迄成たる妹子。女わらべの刃は立ぬ。ホ、所詮一ト人は得死まい川勝が引導せんと。ずはと抜て切かゝるを。（95オ）身をかはして飛しさり。コリヤ守屋より助し命所存有ッての狼藉か。ヤアどこへく人非人。女房を返せしは縁者の義理計と思ふか。主人なれ共大悪不道の守屋ノ大臣。用明天皇を害し奉らんとする。又御命助んとすれば此城を責落せ。勝たる時は帝を預る。負たら直キに帝を殺すと。のつ引ならぬ難題。とやせんかくやと思案の的。所詮帝の御命を勝負の運に任せんと。思ひ切たる某が葛城の嶋主へ。契約変ぜぬ御味方。守屋の縁は断切ル義心。夫レに引かへ命を惜み勇士の子迄見殺して。降人に出る恥しらず生置ば苗字の汚。覚悟せよと切り付る。血氣（95ウ）の川勝とむむる妻。二人の嫁も抜はなしのがさじやらじと三人が。太刀筋尖に打込を。受け留る牡丹の石台二つにさつと内よりも。傍ひらめき烈々たる。恐直の光りにおほはれ。二人の女目くるめき。川勝も腕すくばり覚ず跡へたちく。尻居にどつかと座したるは興さめ。てこそ見へにけれ。ホ、さもそふずく。恥も恥辱も日ノ本の。神の御末に奉る。底意包まず明さんと。云つ、立て岩壁の。用意と見へて置たる。裏のはごまを引

落せば。内に玉世の御后。川勝見るよりハ、ハ、はつと恐れ。入てぞ平伏す。

妹子ノ大臣恭々敷。二つの神宝后に備へ。席を改メどつかと座し。守屋が叛逆(96オ)表向に牲ば。用明天皇太子の御

身危上に後の懐胎。いかゞはせんと工夫にとり。三種の神宝なきならば。守屋位を望ム共其かひあらしと思ひの出立。

夜半に紛れて忍び寄。なんなく御蔵の神宝を。奪ひ出たる其所に。又も窺ふ黒襲束。我携へたる神宝を。奪取て欠行をや

らじと揉合捻合しが。無甚や宝剣ンばい取れ。神璽と御鏡諸共に。玉世の后を守奉り。御身を隠此城郭ぼたんの花を愛

するも人にしらせぬ花の王。譬此身はし、びしほに刻まれても。宝剣を尋出し太子へ手渡しする迄は。いつかなく死れ

ぬ命。(96ウ)氏にかへ先程にかへ。助かる命としらずして。亀井ノ介が畜生よ人非人と悪口し。いさめは胸へ釘鏝打明ケ

られぬ天下の大事。壁に耳城の要害洩たるは内通の誠者有。油断ならずと疑へば現在娘も敵の妻。去れて来たは談合づく。

神宝後の御有家かぎ出す犬と恐ろ敷。臆病未練に見せたるを駈は誠と思ひ詰。齒がみをなしての無念泣切も刻も仕たからふ

が。親といふ名で手ざしもせず。口で計腹いせの悪口。よふいふたよふ死だでかいたな。

親の心を知ラぬ子供ら。冥途黄泉の道すがら嘸此親がみれんさを。悔で行ん不便やな死る今はに露程も。云ハぬ心のくる

(97オ)しさ悲しさ。腸を引さいて。燃る、様に有ツたはやいと。こたへくし血の涙。落て当ッて岩角に朱の。薄を飛

しける。

二人の嫁も心とけ。川勝は猶感じ入。思ひ設ぬ神宝爰に有こそ有難やと。そゝろ怡ぶ計。月益は夫トの刀我と我ふゑのく

さりを一ゑぐり。皆々是はと取付ば。苦しき息をほつとつき。夫トに添たい大切を。一途に思ふ愛着心。川勝殿に手柄させ

守屋様の大忠心。と、様に降参す、め。養はすをひけらかし。夫の自慢せふ物と深ひお心夢にもしらず。兄々達のしなしやんすを。真実何共思はぬはわたし計で有た物。氏に疵付名を汚すを（97ウ）悦びし此悪魔。親のかざりを香刺の罰が忽身に報ひ。生ていられぬ頼恥の。娑婆と冥途の兄親へ。云訳にする。自害ぞや。ナウこちの人。悪と思はず悪に成れば。夫をしたふ女の一筋。不便と思ひ夫悔じやと。いふて聞して下さんせ。皆様救しての声も次第により果。父上さらば。我夫さらば。兄様達へ何もかも。早ふおしらせ申ませふ。名残おしやと夫の顔。見やる目色もぼたん花つゆに。きへ行はかなさよ。人々わつと取すがれば。川勝もめをしばた、き。月益でかした。死ねば成ぬ不実の行跡。父のかざりを剃し故アノ彈正めが誠と思ひ。用明（98オ）天皇預けしは則そちが助けし同然。未来迄も夫婦のしるし。焰魔の張のはなむけせんと。鎧の引合より取出す錦の袋は十握の御劍。ヤア扱は其時の黒将衣束は。川勝で有たかと。過しを互に語合心は替らぬ忠義の盜。聳鼻共くら粉れ危ひ事と手を打て。割符をあはず忠臣は。駿河で夢に富士を見て。起て富士見る心地也。

川勝伊美御運を祝し。三種の神宝揃ふ上は。最早太子の行衛を尋。守屋退治の御旗上我は館へ立帰り。天皇供奉し奉らん。ホ、夫こそは肝要なれ。聖徳太子の御在所は（98ウ）跡見ノ赤禱調子丸。職人数多付従ひ。河内の国に御忍びと聞て川勝安堵の思ひ。互に顔は勇共傍にむなしき月益が。名残の涙果しなき。浮世を見切輪廻の黒髪。ふつつつと押切嫁。一ツ時に三人の子を殺したる我法体。太子の御味方仕り弓箭の道学ぶ共。我レは一生出家の姿に小野の妹子は是迄。先組の苗氏秋の坊形子は仏道心は神道。手扶劍は両部ぞと。立る妻帯子孫迄。四天天寺に今も猶秋の御坊と尊むは此法心の末とかや。后も涙にくれ給ひ。誠にかゝる人々の名を末世迄残す為。仏法靈（99オ）地の三水に三人の名を手向んと。仰が直ク

に未来の土産。妹子神宝守奉り。二人の嫁は月益が。亡骸野辺の。草煙。仏法最初の天王寺。御津の伽藍に三の井戸。亀井の水。赤井の水。月益がための益井の水と。きのふの束帯けふ衣。我はうき世に秋の坊。三人の子に二人の嫁。川勝妹子七人に替る。不常の七ふしぎ。しばらく御産を二上台。二人の尼の庵室は尼の上とて尼上が嶽出る。城内火宅の門。開く御運と祝したる。声も涙にかき曇り別てこそは出て折(99ウ)

第五

不善を幽暗の中に為者は鬼神得討とかや。守屋が勢海内に満渡り。目九五の位を穢し新夕に建る内裏の結構。上棟の義式とて大床に座しければ。鳥ッ取熊人綾ッ彈正犬面大学初とし。其外諸卒居流して。万歳樂を寿けり。

庭上へうやく敷何か白木の角柱。二人かき出御階へ差上。ハア私は甚五郎と申棟梁。私は棟梁脇お棟上の法式は職人の秘密事。此寸法の角柱用いた例はござりませぬ。ホウ儕レ等が寺にはない筈。天照ル神の御殿真の御柱になぞらへ。此守屋が身の長の寸法を以。万代不(100才)変の固となす。其外は儕等任せ能く様に棟上せよと。硯引寄筆を染年月日時姓名迄。黒々と書キ認。押立見すれば。

一人の男すゝみ出打眺。シヤア扱こそく。此手跡を見頭ん其為に。姿を略し入込だり。我こそは蘇家の馬子の大臣也。実否を糺し太子の虚命はらさねば天下の政勢立がたしと。密に帰朝の姿を隠し心を砕くかい有ッて。今日只今贗筆を己れと頭はず天の責。守屋誅罰の時至ると云ハせも立すからくと笑ひ。ヤア推参成うづ虫め。儕が執筆を贗たるは太子めを罪に落し。万乗の位に付謀。かう云上は助て置ぬ。それ討取レと云捨て。簾中深く入にける。

熊人^{地色ウ}大学^{あたじまのが}直駒^{あたいまのが}遁^ぬさぬやらぬと追^お（100ウ）取巻^と。切^きてか、れば事共^{ことども}せず馬子^{うまこ}が太刀^{たち}に直駒^{あたいまのが}。甚五郎^{じんごろう}が大学^{あたじまのが}を大^おげさに切殺^{きころ}せば。こは叶^かはじと熊人^{くまにん}が。跡^{あと}をも見^みずして逃失^{にげし}たり。

サア是^{こゝ}からは守屋^{もりや}をと切込^{きりこ}後に^{のち}声^{こゑ}を懸^{かけ}。走^は出る^でるは政若^{まさわか}都賀^{つが}若^{わか}。我^{われ}々は葛城^{かつらぎ}嶋主^{じまぬし}が舁^か共^{ども}。父母^{ちちはは}の敵成^{てきなり}しは守屋^{もりや}が首^{くび}は兄弟^{あにぎ}にと。願^{ねが}へば馬子^{うまこ}感心^{かんじん}有^あ。幼^こけれ共^{ども}仕損^{しとん}ずまじき雲氣^{うんき}有^あ。甚五郎^{じんごろう}助^{すけ}太刀^{たち}せよ。我^{われ}は諸軍^{しよぐん}の手配^{てくばり}をと。用意^{ようい}の放火^{ほうくわ}投懸^なて門^{かど}外^{とち}へ出給^{でたま}へば。四方^{よほう}に満^みぐる鯨波^{きんぱ}熊人^{くまにん}かけ出^で。ヤア悴^がめら。親嶋主^{おんじまぬし}を一^{ひと}矢^やに射^やたは此熊人^{こゝのくまにん}。返^{かへ}り討^うじやと無^な二無^{ふた}三切^{さんきり}ッてか、れば兄弟^{あにぎ}は。父上^{ちちのうへ}討^うたは儕^しかと渡^わり合切^{あひきり}結^{むす}ぶ。夫^{おつと}レ討^う取^とと大勢^{おほし}が追取^{おしと}巻^まを。甚五郎^{じんごろう}なき立^たく三^{さん}重^{じゆう}（101オ）へ追^おて行^ゆ。

念力^{ねんりき}尖^とき太刀^{たち}先^{さき}になんなく熊人^{くまにん}切伏^{きりふし}て。とゞめをぐつとさし通^{とほ}。勝^{かつ}ッに乗^{のり}たる兄弟^{あにぎ}が帳台^{ちやうだい}へ懸^か上^{のぼ}る。御簾^{みす}引^ひちぎる其内^{そのうち}に。守屋^{もりや}が努^{いかり}の髪逆^{かみさか}立^た。シヤこしやく成^なちつべいめと。二人^{ふたり}を左右^{さゆう}にかい掴^{つか}み既^{すで}にかうよと見^みへたる所に。

ふしぎや殿中^{めいどう}鳴動^{めいどう}し。金^こ色^{いろ}の光^{ひかり}ひらめき渡^わり守屋^{もりや}が五体^{ごたい}縛^{しば}るが如^{ごと}く。立^たすくばつたる其折^{そのせ}しも。聖徳^{せいとく}太子^{たいし}中冑^{ちゆうけう}に御身^{ごみ}を堅^かメ。黒^{くろ}の駒^{こま}に召給^{めよたま}ひ。南無^{なんぶ}仏^{ぶつ}の舍利^{せり}御手^{ごて}に捧^た。庭上^{にわがへ}に乗^{のり}入^い給^{たま}へば。続^つてそがの馬子^{うまこ}の臣^{おみ}。跡見^{あとみ}ノ赤禱^{あかたご}調子丸^{てうしじやうまる}。軍勢^{ぐんせい}庭^{にわ}に充満^{みちみ}たり。太子^{たいし}手綱^{てづな}をかいくり給^{たま}ひ。神罰^{かみばつ}仏^{ぶつ}罰^{ばつ}天誅^{てんしゆ}の時節^{ときせふ}只今^{ただいま}到来^{たうらい}せり。最早^{もともと}遁^ぬれぬ尋常^{じんじやう}に刑罰^{けいばつ}請^{まが}よと仰^{おほ}を（101ウ）聞^き。ヤアきつくはい成^な一言^{ひとこと}。神も仏も此守屋^{このもりや}が勢^{いきほ}に立^たてづかふや。一々^{ひとひと}掴^{つか}みひしがんと口^{くち}は達者^{たつしや}に叶^かはぬ五体^{ごたい}。無念^{むねん}くとあせる中^{ちゆう}。跡見^{あとみ}の赤禱^{あかたご}弓追取^{ゆみおしと}。きりくと引^ひしほり。切^きて放^はせば守屋^{もりや}が胸拔^{むねは}。羽^うぶくらせめてはつしと立^た。さしもの我武者^{われむしや}めくるめき。どうぞ臥^ふを二人^{ふたり}の子共^{こどもども}。起直^{おこす}つて右左^{みぎひだり}。脇腹^{わきはら}ぐつくと磔^{はつつけ}づき。赤禱^{あかたご}調子^{てうしじやう}が欠寄^{かきよ}て。首討^{くびう}間に川勝^{かわかた}が。天皇^{てんかう}玉世^{たまよ}の後^{のち}を供^{くわ}奉^{ほう}し。勝海^{かつみ}真人^{まこと}神手^{かみで}の臣^{おみ}。秋^{あき}の坊^{ぼく}を初^はめとし。久間^{くま}平^{へい}甚五郎^{じんごろう}。諸軍^{しよぐん}も勇^{いさま}の凱歌^{がいが}を唱^{とな}へ。

朝敵^{あしひ}亡び民安^{あんなん}穩。仏法^{ぶつぽう}王法^{おうぽう}動^{うご}なき。秋津^{あきつ}島根^{しまね}の宮柱^{みやしらべ}。太敷^{たしき}たて、万代^{まんだい}の。亀^{かめ}の三曲^{さんきょく}音曲^{おんきょく}の。栄^{さか}へ豊^{ゆたか}（102オ）に竹^{たけ}の秋^{あき}。
五穀^{ごこく}の秋^{あき}の充満^{みちみづ}る。束^{つかん}の穂^ほなみ四海^{しがい}浪^{なみ}おさまる。御代^{みよひ}こそめでたけれ

浪花

作者並木正三

于時宝曆八^{戊寅}歲八月朔日

東都

二三改

作者文鐘軒
吉川盛紅